

琉球大学学術リポジトリ

19 世紀中葉の西洋と琉球： フランス語史料にみる琉球所属認識 並びに对外政策認識の変遷

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際沖縄研究所 公開日: 2019-07-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下岡, 絵理奈 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44733

19 世紀中葉の西洋と琉球

——フランス語史料にみる琉球所属認識 並びに对外政策認識の変遷——

下岡 絵里奈*

はじめに

19 世紀の西洋では、琉球は善良で温厚な人々が住む場所として紹介され、褒めそやされていた。加えて 1816 年に琉球に寄港した英国船艦長バジル・ホール (Basil Hall) の旅行記はヨーロッパ中で読まれ、その結果、ヨーロッパにおいて琉球民の無私、浄福さはほとんど周知の事実にまでなっていたようである¹⁾。この表現に多少の誇張があったとしても、19 世紀のヨーロッパでは琉球王国の存在が明確に認識され、ヨーロッパ人の興味を少なからず掻き立てていたことは間違いない。しかしながら、桃源郷のごとく描写される一方で、日本と中国という二国の支配下、影響下にあるという琉球王国の実情を当時どこまで詳細に西洋人が知っていたのかは明白ではない²⁾。ヨーロッパ人の琉球認識に関してはバイヴェール氏の概説 [バイヴェール 2005]、並びに近年では鎌田出・伊藤陽寿両氏による研究成果もあるが [鎌田・伊藤 2016]、小論では特に西洋における琉球王国の所属に関する認識に主眼を置き、フランス語史料を通してその変化の過程を検討していきたい。また、1844 年以降、琉球では頻繁になる来琉異国船及び滞琉異国人に対し様々な政策が施行されるが、当時来琉したフランス人達の記述から、彼らがその内実をどこまで把握していたのかも解明していきたい。

1. 1840 年代以前の琉球所属認識

1-1. 島津氏の琉球侵略

琉球王国の真の姿を捉えるにあたって、薩摩藩、ひいては江戸幕府の支配下に置かれる契機となった 1609 年の琉球侵攻は外すことのできない重要な歴史的イベントである。琉球王国の項目がある当時のヨーロッパの著述においても、島津氏による琉球侵略は必ずと言って良いほど言及されている。そこでまず、1609 年におこった薩摩藩の琉球侵攻に関する記述を確認し、その内容について比較検討していこう。

* パリ第七大学博士課程 Doctoral Student, Université Paris Diderot, Paris 7

最初に、まだ曖昧であった琉球王国の存在及びその知識を大々的に広げた立役者であるアントワヌ・ゴービル (Antoine Goubil) の「中国人が琉球諸島と呼んでいる島々についての覚書」(原題: *Mémoire sur les îles que les Chinois appellent îles de Lieou-kieou*, 以下「覚書」と略記)の記述を確認しよう。この「覚書」は徐葆光の『中山伝信録』を基に1751年頃に執筆、1758年にイエズス会の会報誌に掲載された後、再版を重ね、西洋においては琉球へ渡航する際の必読書ともいえる論文となった。現在では「覚書」の日本語訳も出版され、その執筆背景や内容についても広く知られている³⁾。だがこの琉球研究の礎ともいえる論文に目を通してみると、琉球侵略に関する部分は非常に少なく、要約すると、1610年に日本が琉球へ侵攻し、国王の親は殺され、尚寧王は薩摩へ囚人として送還され、2年後に琉球へ帰ってきた、と書かれている程度である⁴⁾。「覚書」では琉球侵攻の年号が1610年と表記され史実と1年ずれているが、尚寧王の抑留期間は2年と正しく伝えられている。

続いて、西洋における琉球研究を刷新したドイツ人東洋学者ユリウス・ハインリヒ・クラプロート (Julius Heinrich Klapproth) の『日本と中国の著書から抜粋した琉球諸島誌』(原題: *Description des îles de Lieou-khieou extraite d'ouvrages japonais et chinois*, 以下「琉球諸島誌」と略記)及び彼が1832年に仏訳した『三国通覧図説』にある琉球侵略の記述を訳出してみたい⁵⁾。因みに森田氏によると「琉球諸島誌」は林子平の『三国通覧図説』並びに『大清一統志』に拠って書かれ、1824年の刊である[森田 1984: 178頁]。以下、上段が「琉球諸島誌」、下段が仏訳『三国通覧図説』の記述である。

この王[尚寧王——以下、角括弧内は筆者注]は薩摩の日本人王と交戦していた。尚寧王は1609年に囚われ、4年後まで琉球の地へ戻って来れなかった。⁶⁾

彼[尚寧王]は薩摩の日本人王と戦争し、捕虜にされ、4年の間日本に留められ、その後琉球へ帰ってきた。[中略]西暦1609年の出来事である。⁷⁾

林子平の『三国通覧図説』を紐解くと、該当箇所は「此時代、国王、薩摩守義弘ノ軍ニ生捕レテ、本朝ニ在コト凡四年ニシテ国ニ皈ルコトヲ得タリ [中略] 慶長十四年也⁸⁾」と書かれており、クラプロートは原文に即して翻訳していることがわかる。この結果、ゴービル論文では誤っていた島津氏の琉球侵攻の年号が1609年と正しくなっているが、逆に尚寧王の抑留期間が4年と伸びている。

では、仏訳『三国通覧図説』のすぐ後に出版されたデュモン・デュルヴィル (Dumont D'Urville) 作の架空の旅行記「風情あふれる世界の旅」(原題: *Voyage pittoresque autour du monde*) では、どのように琉球侵略が描かれているのであろうか。

薩摩から来た武装した船が琉球に降り立った。琉球の島民は抵抗したが無駄であった。彼らは全滅または征服された。国王の父親は殺され、尚寧王は連行され、2年

間 [薩摩に] 留められた [後略]。⁹⁾

この旅行記では前出の論文等とは違い、薩摩が琉球に侵攻してきた年号は記載されていないが、尚寧王の拘留期間が2年に戻っている。この旅行記は「ゴープルの覚書の抜粋が琉球王国の歴史概要として読者に紹介されている」[ベイヴェール 2005: 586 頁] ことから、島津氏による琉球侵略もゴープルの「覚書」に準じた結果、上記の記述に帰結したのであろう。

このように、内容に多少の誤差はあるものの、ヨーロッパでは既に18世紀半ばから、換言すれば、西洋において琉球が注目され始めた当初から、比較的正確に島津氏の琉球侵略が知られていたのである。

1-2. 琉球の「所属」認識

では、1840年代以前のヨーロッパにおける琉球「所属」認識はどうであったのだろうか。前節の通り西洋において島津氏の琉球侵略が認識されているのであれば、それにより琉球は日本の支配下に入ったと考えられても当然である。しかし西洋においては中琉関係こそ明瞭であったものの、日琉関係の内実は長きにおいて推測の域を出なかった。例えばゴープルの「覚書」では、前節で確認した通り本文内に島津氏の琉球侵略に関する記述はあるものの、琉球の所属に関する記述はその注釈内には見つかからない。つまり、琉球王は薩摩王に従属しているとケンペルが断言している、という短い記述に留まるのみである¹⁰⁾。だが19世紀になると、日本語や中国語で書かれた文献が参考にされたことから、日琉関係について次第に言及されるようになってくる。その一例として前節でも用いたクラブロートの「琉球諸島誌」を再度確認したい。この論文はベイヴェール氏が「日琉間の正式な国交についても言及しており、とくに琉球王国が江戸に定期使節団を派遣していることや、徳川幕府への進貢項目に関するも述べている」と指摘しているが[ベイヴェール 2005: 587 頁]、では具体的に何が書かれていたのであろうか。クラブロートは中琉関係について述べた後、日本と琉球の関係を以下のように説明している。

中国と日本の間に位置することから、この国 [琉球] はまた日本帝国への従属を認めざるを得ず、加えて時々 [日本の] 君主に使節を送っている。¹¹⁾

上記の後には琉球の朝貢品及び日本からの返礼品に関する内容が続き、琉球使節について書かれている。また、同論文でクラブロートは那覇港の近くに宮殿 (原文では Yng ngen thing とも記されている) があると指摘し、それについて以下のように述べている。

この場所は単に中国使節の受け入れだけを目的としたものではない。なぜなら、日琉関係において、それ (あるいは近隣の宮殿) は日本の一地方である薩摩王の宮殿と呼ばれているからである。¹²⁾

実際、薩摩仮屋は現在の那覇市西に、冊封使のために作られた天使館は那覇市東町に位置しており、薩摩仮屋と天使館は非常に近い距離にあった。クラブロートは生涯来琉することが叶わなかったが、以上の記述から琉球に関する非常に正確な論文を発表していたといえるであろう。とりわけ日琉関係に言及するのみならず、琉球における薩摩藩の存在、すなわち薩摩仮屋にまで認識が及んでいることは特筆すべき事項である。しかし、クラブロートの琉球研究も完璧とまでは言い難く、琉球所属認識については非常に重大な事実誤認をしていた。以下、『三国通覧図説』の原書と仏訳を見比べ、彼の琉球所属認識をみてみよう。

この小さな王国は中国と日本という二つの大きな帝国の間に位置する為、この二国の支配下におかれている。また[琉球の]住人達は中国の皇帝が自身の在任中に与える名誉称号[中国の年号]を用いつつ、一方では日本に従属している。というより状況次第である時は中国に、またある時は日本に従属していると言う。¹³⁾

上記は原文の「其国、小ニシテ日本、唐山両大國ノ間ニ攝ル、然ル故ニ兩國ニ服従シテ兩朝江聘使ヲ奉ル、日本江聘スルニハ日本ノ年号ヲ用ヒ、唐山江聘スルニハ唐山ノ年号ヲ用ユ、其国力不足バ也、然レドモ唐山江聘スルコトヲバ日本江不秘、日本江聘スルコトヲバ唐山江秘ス、是ヲ以テ見レバ唐山ノ權威、日本ヨリ重シトモ言ベキ歟」¹⁴⁾ という文章に該当すると思われるが、中国に対する日琉関係の秘匿、という部分が訳出されておらず、また日琉・中琉関係の在り方も誤訳されている。加えて、原文で「其国王代替ノ時ハ本邦ヨリ嗣封ノ儀ヲ命セラル、也、亦清主ヨリモ嗣封ノ儀ヲ命シテ冊封使ヲ遣シ印璽ヲモ賜也[中略]平生唐山ニ馴親マサル故ニ唐山ノ事ニハ習ハザル也。本邦トハ境モ近ク素上薩琉ノ交リシゲキ故[後略]」¹⁵⁾ とある節も「この国[琉球]の王達はずっと前から日本より封の授与を受けているにも関わらず、現在では中国清朝の皇帝からも同様に封の授与を得ている。[中略] 今では、琉球王国の住人達は、彼らの島が日本の薩摩地方に隣接するにも関わらず、どちらかという日本より中国に帰属しているように思われる。」¹⁶⁾ と、琉球の日本依存という核心部が真逆に訳されている¹⁷⁾。クラブロートは原文に加筆・削除を施してこの仏訳を完成させたようであるが、日琉及び中琉関係に関する知識不足の故か、このように仏訳『三国通覧図説』には原書と全く異なる記述が散見される。とはいえ、クラブロートの論文及び翻訳によって、中琉関係だけでなく日琉関係も表面化し、それにより琉球の「所属」についての認識も改良されたのであろう。その後、1830年代に来琉したイギリス及びアメリカ人宣教師達により日琉関係が次第に明らかにされ、その認識は次章で述べるように次第に明瞭化してくるようになる。

2. 琉球との邂逅

2-1. 1840年代の琉球所属認識

周知の通り、1844年にフランス船アルクメヌ (*L'Alcmène*) 号が来琉し、フランス人宣教師テオドール・オーギュスタン・フォルカード (Théodore-Augustin Forcade) と中国人のオーギュスタン・高が琉球に滞在したことで、琉球王国の状況は一変した。特に1846年のジャン・バティスト・セシーユ (Jean-Baptiste Cécille) 艦隊の来航以後、西洋人達はより間近で琉球の姿をみることができたのであろう。1844年以降、西洋における琉球に関する記述は次第に鮮明になってくる。例えばアルクメヌ号に乗船していた若いフランス人海軍兵士は、日琉・中琉球関係について以下のように書き残している。

この島[琉球]は、中国とは琉球にとってのご機嫌取り問題である、年に一度の朝貢をするだけの関係であったが、日本とは多くの商取引があり、日本のジャンク船が加工されたあらゆる品物を琉球に持ってきて、琉球に豊富にある砂糖を沢山持って帰っているということを我々は知っていた。¹⁸⁾

彼の記述から、1844年に来琉したフランス人達は日琉関係を誤認していたクラブロートの論文や翻訳に引きずられることなく、日琉・中琉関係を比較的正確に認識していたことがわかる。特に、上記史料では中琉間の朝貢関係のみならず、日琉間の商取引にも言及していることから、1840年代において日琉間の経済的繋がりに関する認識が深まっていることが読み取れる。

続いて1846年に来琉したセシーユの琉球所属認識はどうであろうか。彼は海軍大臣への書簡で言及している通り、単に琉球王府に条約締結を迫っただけではなく、総理官との会話の中で自ら敢えて中国の話題をふるなど、滞琉中に中琉・日琉関係の様相を探る努力をしていた。その結果、セシーユは琉球王府との琉仏条約締結交渉において琉球側が条約に反対するのは「彼らにとって必要な、というより不可欠である日本との貿易ができなくなる」¹⁹⁾ からであり「沖縄人は中国との関係しか明らかにしようとしなかったが、彼らがそれよりも将軍の影響下にあり、毎年三隻のジャンク船が彼に貢物を運ぶために那覇から出ているという事は確かである」²⁰⁾ との結論に達した。セシーユは、彼の野望であった琉仏条約の締結計画こそ頓挫したものの、逆に琉球王府と条約締結交渉の場を持ったことで、中琉関係を前面に出し、日琉関係をひた隠しにするという琉球の姿を自分の目で確かめることが出来たといえよう。また彼は中国においても琉球について官吏に尋ね、琉球は「日本の属国ですが、中国にも朝貢はしています」²¹⁾ という答えを引き出している。

次に、フォルカードの後続として1846年から約2年間琉球に滞在したフランス人宣教師ピエール・マリ・ルテュルデュ (Pierre-Marie Leturdu) の見識を探りたい。セシーユは

来琉時、条約交渉だけでなく琉球王府に宣教師の滞在環境の改善も要求しており、その結果、ルテュルデュや彼から数か月後に来琉した同じくフランス人宣教師のマチュー・アドネ (Mathieu Adnet) は滞琉中に琉球語を教授してもらうなど、フォルカードに比べると改善された滞在環境にあった²²⁾。それ故ルテュルデュらは王府役人の目を盗んで琉球の人々と会話をしており、その中で琉球の内情を聞き出すことができたようである。例えば彼は久米島の行政官であったという老人から、琉球を本当に統治しているのは日本の役人であり、彼らは那覇に住んでいるという事を聞き²³⁾、また琉球の年取った僧侶からは琉球が日本の一地方であることを教えてもらった²⁴⁾。加えて、彼は三人の貴族と以下のような問答を行ったようである。

「沖縄と唐 (中国) はひとつですか?」「いいえ、別々です。」「ヤマトウと沖縄は別々ですか?」「いいえ一つです。」彼らはまた私に、医者や芸術家、学者などは鹿児島に勉強しに行くと言った。²⁵⁾

ルテュルデュのいう「三人の貴族」が具体的に誰を指すのか定かではないが (ルテュルデュは琉球では王と役人、貴族、そして一般庶民の三つの身分があると考えていた)、機会がある毎に琉球の所属に関する情報収集を行った結果、彼は「人々が沖縄王国という名で飾っているものは、実際は日本の一地方、あるいは一県に過ぎない」²⁶⁾ ものであり、「琉球王国、あるいは話し言葉で沖縄 Oukigna 王国 (日本皇国の 64 地方のひとつ)」²⁷⁾ であるという結論を出している。このようにルテュルデュもセシーユと同様、日琉関係の概観を把握していたが、日琉関係の発端となった島津氏の琉球侵略に関しては「1610 年に琉球の権力者が、おそらく天皇に先導されて、王に反抗し、太閤様はこれを利用して琉球に軍を送った。」²⁸⁾ と記していることから、薩琉関係については領略できなかったようである²⁹⁾。

最後に、そんな彼を迎えに 1848 年に来琉したフランス船バヨネーズ号 (*La Bayonnaise*) の船長エドモン・ジュリアン・ド・ラ・グラヴィエール (Edmond Jurien de la Gravière) の視点を明らかにしておきたい。彼は琉球について、こう記している。

カトリック宣教師達は、この牧歌的な島々において、日本人総督の手によって支配されている長達が [琉球の] 民衆を隷属させ、隷属させられた民衆は残虐な圧制のもとで呻いていることを我々に知らしめた。このカトリック宣教師たちの考察はベッテルハイム氏の報告によって立証がなされている。³⁰⁾

後述のように、グラヴィエールはわずか 2 日しか琉球に寄港しておらず、したがって彼の航海記はルテュルデュ達からの滞琉報告をふまえた上での所感、分析だと思われる。グラヴィエールはまた、琉球がフランスとの条約及び貿易を拒んだ理由として「もし仮に貧しい沖縄の王国が他の国々と同盟を結ぶことを欲すれば、日本人はトカラの船に那

覇へ行くことを禁じるであろう³¹⁾と通達してきたことも挙げており、ルテュルデュと同様、琉球は日本の監視下にあると考えていた。このように1840年代も後半になると、西洋船の船長達は宣教師達を琉球へと送迎する過程で、自身の滞琉経験に加え、実際に滞琉した宣教師たちの見解を共有することで、琉球に関する知見を広げていったと考えられる。そして、それは即ち琉球が隠し続けた日琉関係が少しずつ、しかし確実に明るみに出てくることを意味していたといえよう。

異国船の来琉が頻繁になり、かつ異国人の滞琉が恒常化したことにより、1840年代はゴービルやクラブロートといった琉球研究の古典的論文や各国の航海記等の誤りが徐々に露見し、琉球での活きた交流によって、琉球所属認識の修正・変更がなされた時代であった。換言すれば、1840年代を境に西洋人の琉球所属認識の根拠は文献から実地での経験、見聞へと変化し、日琉関係のあらかたを知得したといえよう。とはいえ、19世紀前半にクラブロートが琉球における薩摩藩の存在に言及していたにも関わらず、史料中に薩摩藩に関する記述がほとんど見られないことから、西洋人達が広く理解していたのは日本と琉球との関係であり、薩琉関係ではなかったことに注意する必要がある。先行研究において、特にセシーユが薩琉関係を見抜いていたという記述が散見されるが、史料内の「日本」（もしくは「度佳喇島」）という言葉に引きずられ、現代の我々の知識を以てそれを「薩摩藩」と解釈するのは再考の余地がある。何故なら後述するように、彼らの薩琉認識はまだまだ曖昧であり、日琉関係が実は薩摩藩との関係であることに気が付くには、もう少し時間と経験を要したからである³²⁾。

2-2. 1850年代の琉球所属認識

続く1850年代ともなると、異国船の来航はイギリス及びフランス船だけにとどまらず、加えて条約締結という明確な目的を持った艦隊が琉球に投錨し、条約の調印にこぎつけたことで、日本のみならず琉球王国にとっても苦渋の選択を迫られる時代であった。諸外国と江戸幕府、もしくは琉球王国が条約を結ぶということは、当然琉球の「所属」が問題になるという事をも意味するが、では西洋における1850年代の琉球所属認識はどこまで到達していたのであろうか。

琉球が諸外国と条約を締結する前年、1854年に琉球を訪れたイワン・ゴンチャロフ (Ivan Gontcharov) の航海記は既に日本語訳も出版されており³³⁾、17世紀初頭におこった薩摩藩による琉球征伐にはじまる日本への従属、中国への自発的進貢が言及されているが、作家である彼はプチャーチン率いるロシア探検隊に同行し、9日ほどを琉球で過ごしただけにすぎない。西洋における琉球所属認識がもう少し具体性を増すためにはやはり実際の交流が必要不可欠であったようであり、1855年、海軍少将として琉仏条約を締結するために来琉したニコラ・フランソワ・ゲラン (Nicolas-François Guérin) が興味深い手紙を残している³⁴⁾。ゲランは琉仏条約締結の交渉中、後ろで手を引いている人間がいることに気が付いてはいたが、その人間の正体までは分からなかったとして、海軍並びに植民地大臣に宛て、以下のような推察を送っている。

大臣殿、琉球は江戸から派遣されたある一人の属州総督によって支配された日本の一地方でしかないと思われます。またこの人物の非常に強力な意思は〔琉球〕王国の最高指導者達を屈服させており、この人物は私が締結しなければならなかった条約に対するたった一人の敵でした。〔琉球の〕王は単なる子どもでしかありません。中国使節には形式的にしか相談をしておらず、この中国使節は〔琉球の〕王国の問題にいかなる影響も与えはしない、ということは疑いようがありません。³⁵⁾

この史料から、前節でみた1840年代の琉球認識が1850年にも受け継がれていること、そしてまた1850年代においては日琉並びに中琉関係の本質がより深く、より明瞭に認識されるようになったことが読み取れる。それを裏付けるように、ゲラン船に乗船していたテオフィール・オベ (Théophile Aubé) も「江戸や北京の臣官達による打算的な主張があるが、〔中国と日本の〕真ん中に位置している琉球王国は、この二つの強力な帝国に従属している。王国の首都である首里に大使が住んでいる中国の影響力より日本の影響力は見えにくいにも関わらず、〔琉球では〕日本の影響力の方が強い。」³⁶⁾と表現している。加えて1855年2月から1856年10月までを沖縄で過ごしたフランス人宣教師メルメ・カション (Mermet Cachon)³⁷⁾も「36の島から成る琉球諸島は、その地理的位置から中国と日本の間の中間列島となっている。この二つの帝国は〔琉球に対する〕支配権を主張している。一つ目の国〔中国〕は年に一度の進貢をうけているから、二つ目の国〔日本〕は琉球に専制的な権力を行使するからである。」³⁸⁾と琉球における日本の存在を重視しており、またゲランに随行し来琉したオーギュスト・ウルティエ (Auguste Heurtier) も「中国と日本に年一度年貢を払っている琉球島は、そもそも中国とはわずかな通商関係でしかなく、しかし日本とは十分な商取引を行っている。」³⁹⁾と、やはり西洋人に対して隠匿されている日琉関係の方が重要であることを把握していた。そんな中、メルメと同時に琉球入りしたフランス人宣教師ルイ・テオドール・フュレ (Louis Théodore Furet) は以下のようにして、日琉関係に関する確証を得たようである。

琉球の人々は中国にのみ従属していると主張します。それでも、特に日本に支配されていることはやはり明らかです。〔中略〕日本や日本との関係について質問された役人達が明らかに困惑することも、我々にとってはその従属を十分に証明するものです。その上、我々が到着したとき (1855年3月2日)、我々は港の砦の近くで2隻の日本の船を見ました。⁴⁰⁾

このように1850年代に書かれた西洋人の琉球所属認識を概観してみると、1840年代に比べ、琉球の対日・対中外交の内実が次第に明確化し、少なくとも琉球に来航した西洋人にとって琉球における対日関係の重要性は共通認識となっていたことが読み取れる。だが、1850年代において「琉球には日本の人間がいる」という核心を突いたゲランの認識や日本の船を見たというフュレの証言が出てくるものの、日琉関係の本質、すなわち

琉球における薩摩藩の存在は未だ不明瞭であった。

とはいえ、薩摩藩に関する記述は1850年以降、稀ではあるが散見されるようになる。例えば前出のウルティエは、彼自身が農業・商業省の代表だった背景もあってか琉球の農業について説明する中で「米や砂糖の収穫は鹿児島、つまり琉球の人々が従属していると認めている薩摩（九州の日本の島）藩主に送られる。」⁴¹⁾と述べているし、またフェレにおいても「私が香港で出会った日本人を信じるなら、琉球王国は薩摩の王子の領地で、日本に最も美しい綿織物を供給しているということです。」⁴²⁾と薩琉関係について言及している。しかし、中琉・日琉関係のおよその枠組みは把握しているものの、その詳細は各人によって異なっていたことから、フランスにおける日本学の先駆者であるレオン・ド・ロニー（Léon de Rosny）が告白しているように、「実際には、中国、そして日本に対する琉球諸島の政治状況はどうか、我々はまだ明確にすることが出来ない。」⁴³⁾というのが現実であった。

3. 琉球王府の外交政策に対する認識

3-1. 琉球王府の対異国船・滞琉異国人政策とその認識

前述の通り、1840年代にフランス人並びにイギリス人宣教師ベルナード・ジャン・ベッテルハイム（Bernard Jean Bettelheim）一家の滞琉が始まったことで、琉球王府は来琉異国船のみならず、滞琉異国人への対応も余儀なくされた。琉球王府は仏琉の交易を持ちかけたアルクメヌス号船長デュプランに対して「小国産物少、金銀類出産無之、交易之儀何分ニ茂不相調」⁴⁴⁾と琉球の貧しさを前面に押し出すことでその提案を退け、また彼によって留置されたフォルカードとオーギュスタン・高に対しては丁寧に取り扱い、次に来航するフランス船で何事もなく帰ってもらうという方針で対応することに決した。デュプランの滞琉期間が短かったこともあり、彼が提案したフランスとの交易は避けられたものの、結果的にはフランス人宣教師及びその唐人アシスタントの滞琉を追認してしまった琉球王府は、デュプランに示した「貧国琉球」というイメージを崩さないよう、琉球国内にまでその理念を行き届かせ、徹底させざるを得なくなった。当時の廻文には以下のようにある。

御当地之儀、錢不自由有之、穀物等を以致取遣候段、異国人共江被御達置候。就而者、あらわに持行、異国人目ニ掛候儀茂候而者、兼而之御達不実ニ相成候儀者勿論、広ク通融之所見及、至而御故障可相成候条、一統其心得を以、錢持行候節者覆ひ隠し、異国人目ニ不掛様可相嗜候。[後略]⁴⁵⁾

当然ながら「御当地之儀、錢不自由有之」という文面は実際の琉球王国の様相と異なるわけであるが、異国人が滞琉し、あまつさえ琉球の地を歩き回るという状況に対応するため、かつ小国琉球というイメージを彼らに信じ込ませるためには、琉球王府が対外的

に装っている貧国琉球のイメージを国内においても普及・徹底させる必要があった。この琉球の「小国政策」は銭の所持にとどまらず、魚介類、果物類にまで及び、それ以外でも「惣而無多事品者覆ひ隠致商売候様」と通達された⁴⁶⁾。加えて琉球王府はフォルカードの滞在を理由に慣例儀式を取りやめるなど、常に異国人の目を意識し、異国人にとって琉球が貧困、小国、そして不自由な国として映るよう最善を尽くしていた。だが琉球王府がこのような政策を施行していたにも関わらず、フォルカードにとって琉球における邸宅として宛がわれた聖現寺での食事は豪華なものであったらしく、「後になって分かったことですが、実際にはこの豊饒な土地にとっては、我々に供したあれほど豪勢な食事もほんのささやかなものに過ぎなかったのです。琉球では人が言うほどの貧困は感じられませんでした。」⁴⁷⁾と回想している。また、フォルカードは琉球王府の対外政策について「自分たちがたいへん貧しいように見せかけるために、外国人には一番立派なものを送っている風を装っている」⁴⁸⁾とも分析しており、琉球王府が描く貧国像と西洋人のそれとの間には乖離があったようである。しかし、常時琉球王府役人の監視下に置かれ、かつ行動が制限されていたフォルカードにとって、その滞琉環境の厳しさから、琉球が政治的、経済的に展開した「小国政策」の本質を見抜くことは困難であった。

琉球王府が展開した「小国政策」に亀裂が生じるのは、フォルカードが滞琉してから2年と2か月が過ぎようという頃、セシーユ艦隊の第一陣としてゲラン艦長率いるサビエヌ号 (*La Sabine*) が来航した際である。ゲランは来琉直後、有償での物資提供を要求し、琉球王府は表面的にはあるものの、その受理を表明した。この件はアルクメヌ号来琉時にも問題となっており、琉球側が「賄料等代銀者不相請取国法」としてフランス側に代金の受け取りを何度も断った結果、フランス人によるハンガーストライキが起り、やむを得ず「時々決算相請取、蔵方江格護」することにした、という過去があったので無下に拒否することもできなかったのであろう⁴⁹⁾。ゲランから約1か月遅れて来琉したセシーユはこの琉球の「国法」について「船長らが迷惑をかけず、できるだけ早く立ち去るように、政府が外国船に無償で彼らの必要なものを与えるという、この国の大昔からの習慣」⁵⁰⁾であると解釈しており、自身も必要物資に対する支払いを琉球王府に表明している。加えて、セシーユは琉球王府との条約交渉の過程で出された食事の質素さから「彼らのねらいは、この国が貧しく、すべてに不足しているということを外国人に信じさせることなのである。」⁵¹⁾と琉球王府の「小国政策」をいち早く看破していた。

その後、フォルカードの後継として1846年から1848年にかけて滞琉したルテュルデュ、アドネは滞琉生活が向上したこともあり、セシーユ以上に「小国政策」の内実を洞観することになる。例えばルテュルデュはフォルカードの滞琉の様子について「護衛団を構成する者たちは、尊い外国人を昼夜疲れさせ、絶えず嫌がらせをするよう、しかしできるだけ丁寧にするよう命令を受けていた。」⁵²⁾と異国人達には監視をつけ、丁寧に扱い平穩無事に琉球から退去させるという琉球の対異国人政策を見事に洞察していた他、琉球において何かを購入する際、「沖縄の人々は(物を)与えるが、[代金を]受け取らないと彼らが言う時、それは礼儀でそういうようになっている」⁵³⁾と琉球王府の対異国人

政策についても理解が及んでいたようである。ルテュルデュやアドネ、ベッテルハイムといった1840年代における滞琉異国人第2波の面々は、セシーユの滞琉環境改善要求に加え、自らが琉球王府に度々働きかけた結果、(監視付きではあるが)行動の自由、琉球語教授などを享受できたこともあり、琉球王府の対外政策を肌で感じる事が出来たのであろう。この事は琉球王府も重々承知しており、琉球王府は滞琉異国人及び次第に繁多になる異国船への対応について危機感を募らせていた。

是迄一統致精勤、彼之者共申立時々程能為相断儀二者候得共、西戎之者共専威勢を以何角我俣之仕形有之、其上近来仏英之船多艘来着、右様仏人・英人逗留御当地の様子をも大抵相知候上、又々渡来之筈二而旁不容易、此砌応答向等能々其慎無之候而者、何様成難題筋可相及哉も難計事候(後略)⁵⁴⁾

冒頭の「彼之者共」とは無論ルテュルデュ、アドネ、ベッテルハイム一家を指すが、このように、異国人の滞在について琉球王府は「西戎之者共専威勢を以何角我俣之仕形有之」と、彼らがあまりに我俣勝手であり、かつ自由気ままに行動している事と感じ、その対応に頭を悩ませていた様子がうかがえる。加えて、異国人達は琉球の内情をよく知っており、彼らに対する応答、また異国船への対応も慎重に考え行動しなければいけないと、彼らに対する警戒を強めており、「小国政策」を維持しつつ琉球王国の内情がなるべく漏洩しないよう心血を注いでいた。しかし、琉球王府の秘匿政策にも関わらず、滞琉異国人達は琉球王府に関する正確な情報を収集していたようであり、それは次節でみるように滞琉フランス人宣教師を迎えに来たバヨネーズ号の船長に余すことなく開示され、琉球王国はその神秘のベールを剥がされることとなる。

3-2. グラヴィエールと琉球

1848年、琉球王府の悲願であった異国人退去の日が訪れた。来航したのはグラヴィエール艦長率いるフランス船バヨネーズ号であり、琉球王府の嘆願空しくベッテルハイム一家の退去は叶わなかったものの、それでもルテュルデュを乗せ琉球を出航した。グラヴィエールは琉球に寄港した翌日ルテュルデュを乗せて琉球を出航した故、彼が琉球で過ごした時間はほんのわずかである。しかし彼はルテュルデュから滞琉中に起こった出来事の数々を聞き、琉球王国についての認識を新たにした人物であった。

本論の冒頭、「はじめに」で掲げた19世紀ヨーロッパの琉球観は、実はこのグラヴィエールの記述からとったものである。彼はセントヘレナ島においてナポレオンがバジル・ホールから琉球の話に興味深く聞き、また彼の航海記がヨーロッパ中で一心に読まれたことを挙げ、温厚と称される琉球の人々との交流を深く望んでいたが、実際に彼を待っていたのは宣教師達からの衝撃的な報告であった。グラヴィエールはベッテルハイムやルテュルデュが教えてくれた事として、しばしば琉球に来航した西洋人達を驚かせた琉球王国の無私に関し、次のように記している。

沖縄の役人達が異国船に供給していた食糧の代金を断っていたのは、彼らが日本の命令に従っていただけであった。彼らは長崎で採択された基本方針に従って那覇でも動いていた。台風によって壊れたり航行不能になった船を救いたがったのは、あらゆる手を尽くして彼らの出発を早めるためだった。遠回しな手段で外国との通商を拒否するため[異国船からの]全ての支払いを断っていた。ヨーロッパとの通商関係、それが琉球において特に回避しようと望んでいることである。⁵⁵⁾

周知の通り、琉球王府の対異国船政策は長崎経由ではなく、薩摩藩を通じて幕府の異国船監視指針が「御条目」として琉球に下達され、王府の法令として各地に布達されたという歴史がある[豊見山 2000]。彼らは異国船対策の発布元こそ誤認しているものの、上記から琉球王府の異国船対策の根幹を完全に看破していたことが読み取れる。前時代の琉球研究史の影響か、琉球の民衆を善良で幸せな人々だと信じていた節があるグラヴィエールは、この琉球王国の真の姿を「悲しい現実」と表現し、もし琉球に来て調査研究をする人間がいなければ、今まで描かれてきた田園叙述詩のような琉球というイメージは壊れなかつたろうとも述べている。そして彼はセシーユとの間で行われた琉仏交渉の様子にも触れ、その上で自らを「卑しい王国」と称した琉球の対外政策を以下のように評価している。

謙遜、そして貧窮を装うことで琉球の役人達はヨーロッパの侵略精神から身を守ることができると信じている。フランス戦艦の恐るべき力に対し、彼らは非武装の民衆で抗する。非常にへりくだった弱さ、これほどにも無害な政策を前に、彼らは[西洋の]軍事力を退かせる。⁵⁶⁾

この、琉球は自国の貧しさを前面に出すことによってヨーロッパ人の要求を棄却たらしめ、故に西洋船は退却せざるを得なかった、というグラヴィエールの鮮やかな分析は、裏を返せば琉球王府の「小国政策」が効果的に機能していた証左とも読み取れる。事実、彼が琉球王国に対する認識を改めたのも沖縄を出航してからであり、上記史料に引き続き、次のように自身の寄港を回想している。

我々自身、この巧みな[琉球王府の]政策が[琉球王府の役人達と協議の場を持った]交渉人に与えた困惑を経験した。しかし、もし我々が沖縄の全権代表の神聖な様相やその従者の素朴な風采により、一瞬でも心を動かされていたなら、その際に我々は巧みな役者たちに欺かれていたと本能的に気が付いたであろう。⁵⁷⁾

彼が琉球において王府の役人(布政官と称した棚原親方)と会談の場を持ったのはたった一度だけであったことから、グラヴィエールが直ちに琉球の対外政策のからくりが気付かなかったのは至極当然なことであろう⁵⁸⁾。注目すべきは、彼自身、自分たちは琉球

王府の役人達から思うがままに操られていたと自白しているように、この時、琉球王府の「巧みな」対外政策がフランス人達を翻弄していたという事である。

こうして、琉球王府に操られたままグラヴィエールはルテュルデュを引き取り、琉球王国を出航した。彼は最後に悲しみをもってこう結んでいる。

我々の幻想は消え去った。我々はもう琉球の人々を「島に住む善良で幸せな人達」と呼ぶことはなかった。[中略] 詩的な外面をはぎ取ったこの島々の真実、それは高官達の持つある種の寛容、そして民衆の生まれつきの服従が、他の至るところよりも温和で、忍耐強い隷属を琉球にもたらした、ということなのである。⁵⁹⁾

たった2日しか滞琉していないにも関わらず、彼がこれほどまでに的を射た琉球の対外政策を書き残すことができたのは、彼自身が言明している通り、ベッテルハイムやルテュルデュといった、実際に滞琉した宣教師の談話を身近に聞いたからに他ならない。そして、それはセシーユが看破した琉球王府の対外政策に関する認識が、ルテュルデュの滞琉体験を経てグラヴィエールへと確実に受け継がれていったともいえよう。しかし、グラヴィエールの場合、滞琉期間の短さと、平和な国・琉球というイメージを根強く持っていたために、琉球の真の姿に気がつくにはかなりの時間と苦労を要したと考えられる。

以上を総合して鑑みると、セシーユやルテュルデュが琉球王府の対外政策を見破りつつも、琉球王国が異国船及び異国人に対して低姿勢で採り続けた「小国政策」は、他の様々な要因とも絡み合い、グラヴィエールの来琉時、つまり少なくとも1848年までは非常に効果的に作用していたと結論付けられるのではないだろうか。

おわりに

バジル・ホールをはじめとする航海記等により、1844年にアルクメヌ号が来琉するまで西洋においての楽園であり続けた琉球は、1840年代以降の西洋船来琉、並びに西洋人の滞琉というプロセスを経ることで、段階的にその真の姿をみせていった。デュプランの来琉から始まる一連の対外問題は「外圧」として今まで多く論じられてきたが、西洋にとっては、本論でみてきたように、1840年代以前において西洋で培われてきた琉球研究とその実像のすり合わせの期間、即ち現地での調査期間でもあったといえよう。1840年代に西洋が琉球と条約を結び得なかったのは、今までフランスの情勢不安、セシーユの情熱不足等と説明されてきたが、それだけではなく、西洋において琉球に関する根幹的な知識・情報が不明瞭であったこと、そして、それが故に西洋人が琉球王府の対外政策に翻弄させられたことも重要な要因として挙げられよう。特に自国の不自由、貧困を前面に押し出す琉球王府の外交政策は1840年代に来琉した西洋船に対し非常に効果的に機能しており、異国船の早々の撤退を促していたと考えられる。

ここからは仮説であるが、上述のように1840年代に琉球での経験が蓄積され、琉球王

府の対外政策も明瞭となったことから、1850 年以降、西洋では琉球遠征時に対策がなされ、その結果、西洋諸国は琉球王府が低姿勢で使う外交カード「小国政策」に惑わされることなく琉球王国と条約を締結することが出来たのではないであろうか。この仮説の解明を今後の課題とし、小論を閉じたい。

注

- 1) Jurien de la Graviere, Jean-Baptiste Edmond. *Voyage en Chine et dans les mers et archipels de cet empire pendant les années*, p. 243 (『西洋の出会った大琉球』第 1 期、第 5 巻、Edition Synapse、2000 年所収、以下『西洋の出会った大琉球』と略記)。以下 *Voyage en Chine* と略記。
- 2) 琉球王国の対日、対中国外交をどのように評価するかについては今まで多様な研究がなされており、近年では「従属的二重朝貢」と捉えなおされているが、小論では本題から逸れるため、立ち入らない。琉球王国の対日及び対中国外交については例えば岡本氏、豊見山氏の論著がある。
岡本弘道「近世琉球の国際的位置と対日・対清外交」(『周縁と中心の概念で読み解く東アジアの「越・韓・琉」——歴史学・考古学研究からの視座』周縁の文化交渉学シリーズ 6、関西大学文化交渉学教育研究拠点、89-98 頁、2012 年、大阪)。
豊見山和行『琉球王国の外交と王権』(吉川弘文館、2004 年、東京)等。
- 3) ゴービル「覚書」の日本語訳は矢沢利彦『イエズス会士中国書簡集』第 5 巻(平凡社、1974 年)に収録されている。ゴービルについては森田氏が概説している[森田 1983]。
- 4) Gaubil, Antoine. *Mémoire sur les îles que les Chinois appellent îles de Lieou-kieou*, pp. 211-12 (『西洋の出会った大琉球』第 1 期、第 1 巻所収)。
- 5) クラプロートに関しては、石崎博志「クラブロートの琉球語研究について」(『日本東洋文化論集』6 号、2000 年)、山下重一「クラブロートの琉球紹介」(『南島史学』71 号、2008 年)等の研究論文がある。
- 6) Klaproth, Heinrich Julius. *Description des îles de Lieou-khieou extraite d'ouvrages japonais et chinois*, p. 159 (『西洋の出会った大琉球』第 1 期、第 3 巻所収) 以下、*Description des îles de Lieou-khieou* と略記。
- 7) Klaproth, Heinrich Julius. *Notice des îles LieouKieou, appelées en japonais RiouKiou*, pp. 176-77 (『西洋の出会った大琉球』第 1 期、第 3 巻所収) 以下 *Notice des îles LieouKieou* と略記。
- 8) 林子平『三国通覧図説』15-6 頁(裳華房、1923 年) 国立国会図書館デジタルコレクション等にて閲覧可。
- 9) Dumont D'Urville, Jules S. C. *Voyage pittoresque autour du monde*, p. 352 (『西洋の出会った大琉球』第 1 期、第 3 巻所収)。
- 10) Gaubil, Antoine., *Mémoire sur les îles que les Chinois appellent îles de Lieou-kieou* p. 211.
- 11) Klaproth, Heinrich Julius., *Description des îles de Lieou-khieou* p. 164.
- 12) Klaproth, Heinrich Julius., *Description des îles de Lieou-khieou* p. 168.
- 13) Klaproth, Heinrich Julius., *Notice des îles LieouKieou* p. 173.
- 14) 林子平『三国通覧図説』13 頁(裳華房、1923 年)。
- 15) 林子平『三国通覧図説』17 頁(裳華房、1923 年)。
- 16) Klaproth, Heinrich Julius. *Notice des îles LieouKieou*, p. 173.
- 17) この部分については森田氏が既に取り上げているが[森田 1984: 177-78 頁]、内容比較のため、本論では敢えて原文・仏訳を掲げた。
- 18) *Mer bleue. Archipel de Liou-Tchou. Visite à Napa-Kiang*. p. 312 (『西洋の出会った大琉球』第 1 期、第 4 巻所収)。

- 19) 「セシル提督から「大臣」への手紙(1) 1846年5月15日、マカオ、クレオパトラ号船上にて」202頁(『フランスにおける琉球関係資料の発掘とその基礎的研究』、琉球大学法文学部、2000年、所収)。
- 20) 同上
- 21) フォルカード著、中島昭子・小川早百合訳『フォルカード神父の琉球日記 幕末日仏交流記』(中公文庫、1993年)258頁。以下、『フォルカード日記』と略記。
- 22) 彼らの滞琉環境改善については拙論「セシーユ艦隊来航に関する再検討——セシーユによるフランス人滞琉環境改善要求とその影響——」(*International Journal of Okinawan Studies* 通巻9号、51-61頁、2014年、沖繩)を参照。
- 23) 「1846年—1848年の沖繩滞在に関するルテュルデュ神父の「報告書」」139頁(『フランスにおける琉球関係資料の発掘とその基礎的研究』、琉球大学法文学部、2000年、所収)以下「ルテュルデュ報告書」と略記。原文 *Report on Liou-Kiou* (1849) は『西洋の出会った大琉球』第1期、第5巻に所収。
- 24) 「ルテュルデュ「琉球(沖繩)日記」」120頁(『フランスにおける琉球関係資料の発掘とその基礎的研究』、琉球大学法文学部、2000年、所収)以下「ルテュルデュ日記」と略記。
- 25) 「ルテュルデュ日記」120頁
- 26) 「ルテュルデュ報告書」141頁
- 27) 「ルテュルデュ日記」127頁
- 28) 「ルテュルデュ報告書」152頁
- 29) 「ルテュルデュ報告書」の翻刻者であるベイヴェール氏も注釈内でこの事実を指摘している。[ベイヴェール 2000: 152頁]
- 30) Jurien de la Graviere, Jean-Baptiste Edmond. *Voyage en Chine* p. 243.
- 31) Jurien de la Graviere, Jean-Baptiste Edmond. *Voyage en Chine* p. 244.
- 32) 先行研究の中ではセシーユが琉球王府と条約交渉をする際、既に薩琉関係を看破していたとの記述があり[生田 1992: 49頁、西里 2000: 42頁など]、それに対しベイヴェール氏がセシーユは薩琉関係を知らなかったと反証している[ベイヴェール 2005: 597頁]。またベイヴェール氏はフランスが薩琉関係を明確に認識したのは1850年代以降だと述べているが[ベイヴェール 2000: 5頁]、本論2-2で述べるように1850年代になって漸く薩琉関係を明確に認識し始めたのではないだろうか。
- 33) ゴンチャロフ著、高野明・島田陽共訳『ゴンチャロフ日本渡航記』(雄松堂書店、1988年)など。
- 34) 彼はセシーユ艦隊のうちの一艦として既に1846年に来琉していたが、その際はセシーユの命で琉球にある港の調査に奔走していたため、主に軍知的見地で琉球を見ている。(Guerin, François Nicolas. *Lettre du capitaine de commandant la Saine, à Monsieur l'amiral Cécille, commandant la station de l'Inde et de la Chine* (10 juin 1846) (『西洋の出会った大琉球』第1期第4巻所収)。
- 35) Guerin, François Nicolas. *Lettre au ministre de la Marine et des Colonies. Macao, le 6 décembre 1855*. p. 2 (『西洋の出会った大琉球』第2期、第2巻、Edition Synapse、2002年、所収)
- 36) Aube, Théophile. *L'Expédition de l'Indo-Chine. Macao (Chine), 11 décembre 1855* (『西洋の出会った大琉球』第2期第2巻所収)。尚、この文章は1856年3月15日付でフランスの大衆週刊誌イリュストラシオン紙 (*L'Illustration*) に掲載された。
彼の「王国の首都である首里に大使が住んでいる中国」という記述は、彼の滞琉時には不在であった「中国から来た冊封使が首里に滞在する」という意味で書かれたとも読み取れる。
- 37) メルメ・カシオンについては、近年、ル・ルー・ブレンダン (Le Roux Brendan) 氏が詳しい。彼は「一人の宣教師の運命——メルメ・カシオンと日本」全4編構成(『仏蘭西学研究』第36-9号、2010-2013年)等、メルメに関する論文を多く発表している。
- 38) Mermet-Cachon, Eugène-Emmanuel. *Missions du Japon Iles Lieou-Kieou*. p. 293 (『西洋の出会った大琉球』第2期、第2巻所収)。

- 39) Heurtier, Auguste. *Commerce avec le littoral japonais et les îles Liou-Tcheou, spécialement au point de vue des intérêts français*. p. 10 (『西洋の出会った大琉球』第2期、第2巻所収).
- 40) [宮里 2014: 68 頁] 原文: Furet, Louis, *Lettres à M. Léon de Rosny sur l'Archipel japonais et la Tartarie orientale* は『西洋の出会った大琉球』第2期、第2巻に所収。
- 41) Heurtier, Auguste. *Commerce avec le littoral japonais et les îles Liou-Tcheou, spécialement au point de vue des intérêts français*, p. 36
- 42) [宮里 2014: 69 頁]
- 43) Rosny, Léon de. *Les îles Lou-Tchou*, p. 101 (『西洋の出会った大琉球』第2期、第2巻所収).
- 44) 「案書」(1327号)琉球王国評定所文書編集委員会編『琉球王国評定所文書』第1巻、浦添市教育委員会、1998年、沖繩、422頁。以下、『琉球王国評定所文書』と略記。
- 45) 「廻文」(1379号)『琉球王国評定所文書』第2巻、322頁。
- 46) 同上、323頁。
- 47) 『フォルカード日記』47–48頁。フォルカードは極貧の食生活をしてきたとの評価もあるが [マルナス 1985]、彼の日記を見る限りフォルカードはどちらかというと豊かな食生活を送っていたと考えられる。
- 48) 『フォルカード日記』68頁。
- 49) 「案書」(1327号)『琉球王国評定所文書』423–24頁。
- 50) 「セシル提督から『大臣』への手紙(2)1846年10月12日、マニラにて」196頁(『フランスにおける琉球関係資料の発掘とその基礎的研究』、琉球大学法文学部、2000年、所収) 原文 *Lettre du contre-amiral Cécille au ministre de la Marine et des Colonies. Extrait: visite de la division aux îles Lou-tchou* (12 octobre 1846) は『西洋の出会った大琉球』第1期第5巻に所収。
- 51) 同上、119頁。
- 52) 「ルテュルデュ報告書」132頁。
- 53) 「ルテュルデュ日記」127頁。
- 54) 「英人到着日記」(1388号)『琉球王国評定所文書』第3巻、177頁。尚、引用史料中の「英」は本史料では口構えに英。
- 55) Jurien de la Graviere, Jean-Baptiste Edmond., *Voyage en Chine*, p. 243–44.
- 56) Jurien de la Graviere, Jean-Baptiste Edmond., *Voyage en Chine*, p. 244.
- 57) Jurien de la Graviere, Jean-Baptiste Edmond., *Voyage en Chine*, p. 244–45.
- 58) 「案書 異国一件御内分」(1397号)『琉球王国評定所文書』第4巻、114–19頁。
- 59) Jurien de la Graviere, Jean-Baptiste Edmond., *Voyage en Chine*, p. 245.

参考文献

- 生田澄江(1992)「幕末におけるフランス艦隊の琉球来航と薩琉関係」『沖繩文化研究』19号、1–93頁、東京。
- 上原令(2000)「19世紀中葉のフランス極東政策と琉球」『史料編纂室紀要』25号、83–102頁、沖繩。
- 鎌田出・伊藤陽寿(2016)「1840年代–50年代における琉球帰属問題：フランス・アメリカの琉球認識と琉球・薩摩・幕府の対応からみる」『至誠館大学研究紀要』3号、1–18頁。
- 島尻克美(1987)「幕末期における琉球王府の異国船対策——仏艦船来琉事件を中心に——」『琉球・沖繩 その歴史と日本史像』雄山閣、132–55頁、東京。
- 豊見山和行(2000)「一七世紀における琉球王国の対外関係——漂着民の処理問題を中心に——」『十七世紀の日本と東アジア』山川出版社、101–22頁、東京。
- 仲地哲夫(1982)「日本の開国と琉球」『地域と文化 沖繩をみなおすために』第11・12合併号、19–26頁、沖繩。
- 西里喜行(2000)「アヘン戦争後の外圧と琉球問題——道光・咸豊期の琉球所属問題を中心に——」

- 『琉球大学教育学部紀要』57巻、31-72頁、沖縄。
- パトリック・バイヴェール(翻訳:宮里厚子)(2000)「資料を通してみた十九世紀におけるフランスの対琉球関心」『フランスにおける琉球関係資料の発掘とその基礎的研究』琉球大学法文学部、5-21頁、沖縄。
- パトリック・バイヴェール(翻訳:藤江淑恵)(2000)「フランス政府の対琉球王国政策」『フランスにおける琉球関係資料の発掘とその基礎的研究』琉球大学法文学部、23-66頁、沖縄。
- パトリック・バイヴェール(2003)「琉球王国におけるフランスの海軍・外交・宣教史料について」『前近代日本の日本の史料遺産プロジェクト研究集会報告集』、東京大学史料編纂所、282-95頁、東京。
- パトリック・バイヴェール(2005)「ヨーロッパの琉球認識」『沖縄県史 各論編 第4巻(近世)』沖縄県教育委員会、577-610頁、沖縄。
- フランシスク・マルナス著、久野佳一郎訳(1985)『日本キリスト教復活史』みすず書房。
- 原口泉(1997)「島津斉彬の対外貿易策——在琉仏人書簡の検討——」『鹿大史学』第45号、1-19頁、鹿児島。
- 真栄平房昭(2010)「異国船の琉球来航と薩摩藩」『講座明治維新1世界史のなかの明治維新』有志舎、138-59頁、東京。
- 宮里厚子(2014)「ルイ・テオドル・フュレの手紙——フランス人宣教師のみた1850年代の琉球——」『国際琉球沖縄論集』第3号、67-78頁、沖縄。
- 森田孟進(1983)「ゴービルと琉球」『新沖縄文学』第56号、沖縄タイムス社、130-37頁、沖縄。
- 森田孟進(1984)「クラブロートと琉球」『新沖縄文学』第62号、沖縄タイムス社、172-82頁、沖縄。
- 森田孟進(1989)「フランス人宣教師の見た一九世紀中庸の琉球——フュレ(Furet)の琉球からの手紙を中心に——」『地域からの発想』ひるぎ社、沖縄。
- 横山伊徳(1996)「日本の開国と琉球」『新しい近世史2 国家と対外関係』新人物往来社、366-430頁、東京。
- 渡辺美季(2009)「近世琉球の異国船監視体制」『大阪市立大学東洋史論叢』別冊特集号・東アジア海域世界における交通・交易と国家の対外政策、151-56頁、大阪。

Occident in the mid-nineteenth century and Ryukyu: The transition about cognition of Ryukyu's affiliation and the foreign policy by the Ryukyu kingdom government through the French sources

SHIMOOKA Erina

For a long time, the image of Ryukyu in Occident was such as an “El Dorado”. Although the Occident recognized the fact that Satsuma invaded Ryukyu in 1609, it wasn't aware of the relations of China and Japan. For that reason, the affiliation of Ryukyu was unknown. As the Occident's ships arrived in Okinawa in 1840 and 1850's, the Westerners noticed Japanese presence in Ryukyu. However, Ryukyu was occupied by Satsuma was still hardly known. Since the arrival of a French ship, *L'Alcmène* in 1844, by adopting a modest attitude and by showing the misery of the country

toward the Occident, the kingdom of Ryukyu refused all contact with the foreigners and the kingdom acted so that the foreigners leave as early as possible. As for the foreign policy of Ryukyu, the Occident began to understand gradually. However especially thanks to the stay of the missionaries in Ryukyu, Leturdu, Adnet and the family of Bettelheim, it allowed Ryukyu diplomacy to reveal. Consequently, at least until 1848, this Ryukyu diplomatic politics was very efficient towards Occident.
